

権威の脱構築化と「諧謔」の生成Ⅱパロディとしての『土左日記』

— プレテクスト『古今和歌集』・『伊勢物語』の引用連関 —

東 原 伸 明

(2010年9月27日受付、2010年12月13日受理)

The Deconstruction of Authority and the Production of "Irony": *The Tosa Diary* as Parody

— Its Citational Relationship with Pretexts *Kokin Wakashū* and *The Tales of Ise* —

Nobuaki HIGASHIHARA

(Received: September 27, 2010 Accepted: December 13, 2010)

要 旨

『土左日記』の作者紀貫之は、通常カノンと考えられている漢詩文や和歌の原典を平気で改変し、自己の作品に引用している。この貫之の執筆態度は、権威の脱構築化というべきものであり、すなわちパロディである。『土左日記』は、そうしたパロディの方法によって創作されており、『土左日記』の主要な理念である「諧謔」も、パロディとして生成している。小稿では、従来『土左日記』の典拠として指摘されている、『古今和歌集』と『伊勢物語』をパロディの視座から捉え直し、その引用連関を説いている。

Abstract

Ki no Tsurayuki, the author of the *Tosa nikki* (Tosa Diary), unscrupulously altered original Chinese (*kanshi*) or Japanese (*waka*) poems typically considered canonical to quote them in his work. Tsurayuki's authorial stance can rightly be called a deconstruction of authority, or a parody. The *Tosa nikki* was created according to such a method of parody, and its main principle of irony (*kaigyaku*) was produced as parody. This paper reconsiders the

Kokin Wakashū (Collection of Ancient and Modern Poems) and *Ise monogatari* (Tales of Ise), previously shown to be sources for the *Tosa nikki*, from the point of view of parody, and describes their citational relationship.

キーワード

権威の脱構築化・諧謔・パロディ・引用連関・典拠

Key words:

(deconstruction of authority, irony, parody, citational relationship, source)

所属・学位

本学文化学部文化学科教授 博士(文学)

Academic Appointment & Degree:

Professor, Department of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies at Kochi Women's University (Doctor of Philosophy in Japanese Literature)

1 権威の脱構築化―アレンジャーとしての紀貫之

『土左日記』が初期の散文による文学作品であるという事実を、確認するところからこの稿を始めたと思う。

文学的カノンとして第一の権威にあるものと思われるものは「漢詩」¹¹「詩」にあり、それに次ぐものとしては「和歌」があった。だから紀貫之自らが編者のひとりとなって編集した『古今和歌集』は、文学的なカノンとしては確立したものと見てあつたことは言うまでもない。対して『土左日記』は日記文学、古代の散文文学は、未だジャンルとしての存立も危ういと言えるだろう。

その不確定な『土左日記』は、しかし、文学的権威の漢詩を、そして和歌を「引用」している。漢詩や和歌を「引用」することによって、散文文学としてのテクストじたいを生成している。つまり、『土左日記』という古代の散文文学は、韻文文学を「引用」することによって成立しているという事実がある。

ところで、和歌の権威とは何であろうか。和歌の場合は、たとえ誰が詠んだか解らない歌、著者不明の和歌であっても「読み人知らず」という名称のもとに、一応詠み手の著作的な権利が保証されていることにある。

対して古代の散文文学、日記文学や物語文学の場合はどうであろうか。

たとえば物語文学の場合は、その冊子を借り受けた読者が、読むこと受けることにおいて異本が生成されている事実を看過することはできないだろう。借り出した冊子であるにもかかわらず、己の気の赴くままに筆を入れて別な本文を創り出してしまふこと、改作・改変してしまふことが、散文というジャンルにおいては許されていたという事実である。古代の散文文学には、漢詩・和歌と言った韻文文学に対するような、著作物に対するような権威も権利もなかったのである。

驚くべきことに『土左日記』の書き手は、その権威であるはずの和歌を、自己の著作物に引用してくるに際して、躊躇いもなく平気で改変してみせるのである。これを我々は、どう考えてみたらよいのだろうか。

『土左日記』の作者である紀貫之が、いったい何をめざしてこの作物を執筆したのか。その執筆の動機については、誰しもが納得しうるような明晰な回答を、現在の私にはできそうにない。しかし、パロディという視座から『土左日記』を仔細に眺め直してみると、この作物は全篇を通じて、権威となるもの、優位項を、パロディ化することで脱構築し、価値の逆転現象を引き起こしているように思われてしかたない。¹²

たとえば在原業平や阿倍仲麻呂の故事が、なぜ『土左日記』に「引用」されてこなければならぬのだろうか。それは紀貫之が『伊勢物語』の作者の、有力な候補のひとりであるからだろうか。むしろ私は、従来から唱えられている「紀貫之作者説」を否定するものではない。否定はしないが、しかし、貫之を『伊勢物語』の作者だと考えるよりも、むしろ、『土左日記』じたいの方法論として、在原業平や阿倍仲麻呂の故事を脱構築してしまうような、その大胆なくみの方を重視したのである。

旧稿で述べたことと重複するが、以下確認しておくことにしよう。

八日。障ることありて、なほ、同じ所なり。

今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海辺にて詠まましければ、「波立ち障へて入れずもあらなむ」とも詠みてましや。今、この歌を思ひ出でて、ある人の詠めりける、

照る月の流る、見れば天の川出づる港は海にざりける

とや。

（岩波新古典文学大系 一〇頁）

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。

かうやうなるを見てや、昔、「阿倍の仲麻呂」といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国にかゝる歌をなむ、神代より神も詠ん給ひ、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しみもある時には詠む」とて、詠めりける歌、

青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。かの国人、聞き知るまじく思ほへたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、この言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、當時を思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

(一七一―一八頁)

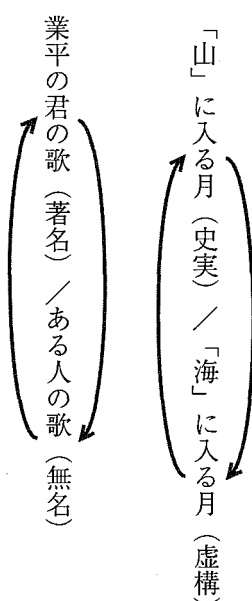
一月八日および、廿日兩日の記事によれば、東の海から昇った月がまた西の海に沈むという首尾一貫した光景を読者にイメージさせるが、一月八日の傍線部「月は海にぞ入る」を小学館新編日本古典文学全集(菊池靖彦校注)の頭注四(二四頁)は、《大湊に擬される前浜などから海に没する月は見えない(竹村義二)。五行後の「てる月の…」の歌を出すための虚構。室津での「月出でにけり」(三三ページ一三行)の虚構に通う。》という注目すべき指摘をしている。そうであるならば遺憾ながらこれは、史実、歴史地理的には絶対にあきえない光景だということになる。まったくの虚構であることは、清水孝之、萩谷朴、竹村義一等の研究成果によって実証さ

れている。「地理的研究」とは、『土左日記』の世界が虚構であり、歴史的、現実にある「土佐」には比定しえない世界であることを証明し、よく跡づけている研究であると言える。

さてその貫之が、虚構の「土佐」という時空を創り出したその方法論については、菊池靖彦によって次のように説かれていた。

「てるつきの……」の歌が詠み出されるために業平の歌があり、その業平の歌が引かれるために海上に沈む月が必要となる、というかたちである。「みやこにて……」の歌の場合も同様で、この歌が詠まれるためには仲麿の故事が引かれねばならぬし、仲麿の故事が引かれるためには海上から出る月がなくてはならぬこととなる。つまり、作者の意識では業平の歌や仲麿の故事、または「あるひと」の歌が風光より先に、すでにあるのである。自然はしばしば作者にとつて都合のよい歌や故事を引用するために、さらにいえば、それらをきわめて時宜にかなったものとするために、意図的に構成されさせたのである。

この菊池の見解は、『土左日記』の脱構築の方法、劣位にあるものが優位にあるものと位相を逆転させる、その論理というものを、端的にそして具体的に説いた、実に驚嘆すべきものである。菊池によれば在原業平も阿倍仲麻呂も『土左日記』のテキスト生成のためには、都合よく利用されているに過ぎないということになる。



仲麻呂の主の歌（著名）／ある人の歌（無名）

在原業平はともかく、阿倍仲麻呂の和歌の方は、『百人一首』をとおして幼少の頃から記憶していたせいも、私にとつては郷愁を催す好きな歌のひとつであった。『古今和歌集』『羈旅』の部立の巻頭を飾る406番に相当する。

406

唐土にて月を見てよみける
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

安倍仲麿

この歌は、「昔、仲麿を唐土に物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より、又、使まかりいたりけるに、たぐひて「まうで来なむ」と出て出たりけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人うまのはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめる」となむ語り伝ふる

（小学館新編日本古典文学全集）

これを紀貫之は「ある人」の歌を詠むための状況を設定するために、仲麻呂の権威を蹂躪することになることもかまわず、大胆にも「天の原」の字句を「青海原」に取り換え、いとも容易に改変してしまっている。この仲麻呂の和歌は前述したように初出が『古今和歌集』であり、紀貫之自身が編者のひとりとして編纂したものであるのだから、貫之はまさに確信犯である。第一の勅撰和歌集、『古今和歌集』という韻文文学の権威を侵害し、改変し、アレンジしてしまっているのだ。だが、しかし、それが『土左日記』という古代の散文文学の脱構築の方法なのであろう。紀貫之は、とん

でもないアレنجジャーだ。

古代の仮名による散文文学の成立にあたっては、その初期の段階において、こんな大胆な改革があったのだということを記憶しておかなければならない。

和歌（韻文文学）／日記文学（散文文学）

2 「亡き子」の主題の生成―典拠という引用の方法

廿七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてはかに失せにしかば、この頃の出で立ちいそぎを見れど、何事も言はず、京へ帰るに、女子の亡きのみぞ悲しび恋ふる。在る人ぐもえ堪へず。この間に、ある人の書きて出だせる歌、

都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり

また、ある時には、

あるものと忘れつ、なほ亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりけると言ひける間に、「鹿児の崎」といふ所に、守の兄弟、また他人、これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下り居て、別れ難きことを言ふ。……

（五頁）

この「鹿児の崎」という地名について長谷川政春は、次のような注目をべき発言をしていた。

……連想としては、地名の「鹿児」↓「かの子」・「子」↓「亡娘」と

展開されたものではあるまいか。元来は、「水夫」の住む崎ゆえに土地の名となったものであろうが、とにかくここにも「ことば遊び」の発想を認めたと思う。なお、亡児のことは、この二十七日の条の記述が初出であることにも留意したい。⁽⁸⁾

長谷川のこの指摘は、「KAKO-NO-SA-KI」という地名の音と、「KA-NO-KO」という音の類似、連想に着目したもののだが、たしかに「亡き子」のエピソードは、この場面を始発として全篇に渡って繰り返し語られている。『土左日記』の書き手である紀貫之が在任中、本当に我が子を亡くしたのか、否か……。それは記録類に辿ることはできないから、「史実」と理解する説と正反対に「虚構」だと考える説とが鋭く対立している。真相は不明としか言いようがないが、私は書き手紀貫之自身の「喪失感」が『土左日記』という作品執筆にあたり、「子供の死」というかたちで主観化されたという立場の説を支持したい。⁽⁹⁾

書き手の「喪失感」とは何かと言うと、菅原道真を典型とする文人貴族層⁽¹⁰⁾の庇護者であった醍醐天皇、宇多上皇、また支持者であった藤原兼輔、藤原定方らが、貫之の「土佐」在任中に相次いで亡くなっているという事実である。

菅原道真という文人貴族層の流れを汲む、下級文人官僚であった紀貫之を庇護してくれたその恩顧の人々が、彼が都を留守にしている間に相次いで世を去ってしまったことは、「都人」としての彼にとって、耐え難い衝撃であつたろうと推察される。恩人を失った、その「喪失感」が、「亡き子」のエピソードとして転換され、『土左日記』という作物においては、亡児追懐の記述として繰り返し語られているのではないかと理解されるのである。

その始発であるこの場面が、『古今和歌集』『羈旅歌』412番の和歌およびとその左注(Ⅱ散文)が典拠となり主題として生成しているという事実は、

もつと重視されなければならないだろう。

題しらず

読人しらず

412 北へ行く雁ぞ鳴くなる連れて来し数は足らずぞ帰るべらなる

この歌は、ある人、「男女もろともに人の国へまかりけり。男まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きてよめる」となむいふ

左注によれば、揃って地方に下った男女夫婦が、帰京の際には夫に先立たれてしまつて、残された妻が、北へ帰る雁の声に自己と同様の境遇を感じているという趣旨である。

これを『土左日記』は、「夫婦」から「親子」の關係に移行置換し、その「子供の死」として主題化しているのである。

またこの「子供の死」、亡児追懐の記述が六箇所あることの指摘とその詳細な分析を長谷川政春⁽¹¹⁾が行つて以来、土方洋一⁽¹²⁾、神田龍身⁽¹³⁾らによって、若干のニュアンスの違いはあるものの、長谷川が説くように象徴的なものとして追認されている。土方洋一はこの記述を《出来事の公的な記録という建前からもつとも外れる部分》として、《私的な感情を象徴する記述》と捉えている。

①十二月廿七日

②一月十一日

③二月四日

④二月五日

⑤二月九日

⑥二月十六日

亡児追懷の記述の最初が①任国「土左」の地を離れ「大湊」に代表される外海に漕ぎ出す直前に現われ、最後の記述が⑥の京の自宅に帰着しその惨状を嘆く場面に現われているという事実を土方は、《子供の死を嘆く心情は、舟長たる前国司が土佐国を離れてから都へ帰り着くまで、即ち官人としての身分から解き放たれた、何者でもない宙吊りの立場にある間に限って現われているのであり》、その船旅は、《往路においては傍らにあった幼児が復路においてはどこにもいないという喪失感を確認し続ける旅》であり、《亡児追懷は都へ帰る旅の記録という『土左日記』の記述の枠組みと一対のものなの》であり、《亡児追懷の記述が、この日記の表現構造の上で象徴的な意味を担っている》と分析している。

『土左日記』はこのように、亡児の追懷「子供の死」の主題を全編を通して交響楽の通奏低音のごとく、繰り返し奏でているのである。

3 プレテクスト『古今和歌集』『羈旅』の部立の位相

さて『土左日記』は、そうした文学的な権威である『古今和歌集』と、その『古今和歌集』の和歌を引用することによって成立している『伊勢物語』という、二つの著名なプレテクストとの連関、すなわち作中に「引用」してることによってテクストを生成しているのである。

ただし、その「引用」の様相は冒頭でも述べたように、パロディ化であり、権威の脱構築化にはかならないのだ。小稿ではそのパロディの具体的な様相を、十二月廿七日の条を中心に論じてみたい。

その際、プレテクストとなる『古今和歌集』『羈旅』の部立は、『土左日記』の全篇の骨格を形成する機能をもつものとして、とくに重大な位相にあるということについて説明しておかなければならないだろう。

十二月廿七日の条、「鹿児の崎」の場面は、前掲「羈旅歌」412番の和歌

およびとその左注という散文を典拠としていけるとともに、同じ「羈旅歌」の410番の和歌・詞書および411番の和歌・左注という散文とを併せて、典拠としていると思われるからである。

410 東の方へ、友とする人ひとりふたりいぎなひていきけり。
三河国八橋といふ所にいたれりけるに、その川のほとりに、
杜若いとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりゐ
て、「かきつばた」といふ五文字を句のかしらにすゑて、「旅
の心をよまむ」とてよめる
在原業平朝臣
唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

411 名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
武蔵国と下総国との中にある、隅田川のほとりにいたりて、
都のいと恋しうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐ
て、思ひやればかぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわび
てながめをるに、渡守、「はや舟に乗れ、日暮れぬ」と言ひ
ければ、舟に乗りて渡らむ」とするに、みな人ものわびしく
て、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の嘴と
足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりけれ
ば、みな人見知らず。渡守に「これは何鳥ぞ」と問ひければ、
「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きてよめる

繰り返すが前掲の阿倍仲麻呂の故事をも含め、『土左日記』は全篇が、『古今和歌集』『羈旅歌』を下敷きにして話の筋を展開させているらしいということが、よくわかるだろう。

続きである413番以降を掲出すると、以下のようなになる。

413 「東^{あづま}の方より京へまうでく」とて、道にてよめる おと
山かくす春の霞^{かすみ}ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

414 越国^{こしのくに}へまかりける時、白山^{しらやま}を見てよめる みつね
消えはつる時しなければ越路^{こしち}なる白山の名は雪にぞありける

415 東へまかりける時、道にてよめる つらゆき
糸による物ならなくに別れ路^{わかち}の心細くも思ほゆるかな

416 甲斐国^{かひのくに}へまかりける時、道にてよめる みつね
夜を寒み置く初霜^{はつしも}をはらひつつ草の枕^{まくら}にあまたたび寝ぬ

但馬国^{たしまくに}の湯へまかりける時に、「ふたみの浦」といふ所にと
まりて、夕さりの乾飯^{かれいひたう}食べけるに、ともにありける人々の歌
よみけるついでによめる 藤原兼輔^{ふじはらのかねすけ}

417 夕月夜^{ゆふづきよ}おほつかなきを玉櫛^{たまくしげ}笥^けふたみの浦はあけてこそ見ぬ

418 惟喬親王^{これたかのみこ}の供に、狩にまかりける時に、「天の河^{あまがは}」といふ所
の川^{かわ}のほとりにおりゐて、酒など飲みけるついでに、親王の
言ひけらく、「『狩^{かり}して天の河原^{かはら}にいたる』といふ心をよみて、
盃^{さかづき}はさせ」と言ひければよめる 在原業平朝臣^{ありはらのなりひらのあそん}
狩り暮^{かりくら}したなばたつめに宿^{やど}からむ天の河原にわれは来^きにけり

親王^{みこ}、この歌をかへすがへすよみつつ返しえせずなりにけれ
ば、供に侍りてよめる 紀有常^{きのありつね}

419 ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじと思ふ

420 朱雀院^{すざくゐん}の奈良におはしましたりける時に、手向山^{たむけやま}にてよめる
すがはらの朝臣
このたびは幣^{ぬさ}もととりあえずたむけ山紅葉^{もみぢ}の錦神^{にしき}のまにまに

421 たむけにはつづりの袖^{そで}も切るべきに紅葉^{もみぢ}に飽^あける神やかへさむ
素性法師^{そせいほふし}

418、419番の和歌との連関で、二月九日の「渚の院」の叙述も浮上してく
る。

かくて、船曳^{ふねひ}き上るに渚^{なぎさ}の院^{ゐん}といふ所を見つ、行く。その院、
昔^{むかし}を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後方^{しりへ}なる岡^{おか}には、
松^{まつ}の木どもあり。中の庭^{には}には、梅^{うめ}の花咲きけり。こゝに、人々^{ひと}の言
はく「これ、昔、名高く聞こへたる所なり。故惟喬^{これたか}の親王^{みこ}の御供^{おほむとも}に、
故在原^{ありはら}の業平^{なりひら}の中將^{なかつら}の、

世^よの中に絶^なへて桜^{さくら}の咲^さかざらば春^{はる}の心^{こころ}はのどけからまし
といふ歌詠^{うたよ}める所なりけり」。(二八―二九頁)

ただし『土左日記』は、この二首の和歌じたいを直接は「引用」してお
らず、典拠論的な視座からは『伊勢物語』の方が典拠だろうが、テキスト
の骨格として話の筋立てを形成していることは間違いない。

また、『土左日記』では、海賊の噂を恐れ神仏への祈祷の話題が繰り返
されるが、420番の和歌の「神のまにまに」という詠歌状況が転用されてい
るらしいこと、ならびに421番の和歌の「手向け」と「幣」という語は、一
月廿六日の「わたつみの道触りの神」に「幣」を手向けする条、および二
月五日「住吉の明神」に、「幣」と「鏡」とを奉る条が連関しているとい

える。典拠の「山の神」へのそれを、「海の神」への「手向け」へと転用したことによる場面の生成ではないか。

廿六日。まことにやあらむ、「海賊追ふ」と言へば、夜中はかりより船を出だして漕ぎ来る途に、手向けする所あり。楫取して幣奉らするに、幣の東へ散れば、楫取の申して奉る言は、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめ給へ」と申して奉る。これを聞き、ある女の童の詠める、

わたつみの道触りの神に手向けする幣の追風止まず吹かなむとぞ詠める。

(二〇頁)

かく言ひて、眺めつゝ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げどもく、後方退きに退きて、ほとくしくうち嵌めつべし。楫取の言はく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。欲しき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて、「幣を奉り給へ」と言ふ。言ふに従ひて、幣奉る。かく奉れども、もはら風止まで、いや吹きに、いや立ちに、風波の危ければ、楫取また言はく、「幣には御心の行かねば、御船も行かぬなり。なほ、〈嬉し〉と思ひ給ふべき物奉り給へ」と言ふ。また言ふに従ひて、へいかゞはせむ」とて、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉る」とて、海にうち嵌めつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面ごととなりぬれば、ある人の詠める歌、

ちはやぶる神の心を売る、海に鏡を入れてかつ見つるかな
いたく、「住の江」、「忘れ草」、「岸の姫松」などいふ神には、あらずかし。目もうつらく、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取の心は、神の御心なりけり。

(二六―二七頁)

典拠である道真の和歌では、この度の旅は、急な旅であつたので小倉山の山の神に手向けるべき「幣」を用意してこなかったが、この山の一面の紅葉を「幣」の代わりとして手向けます、「神のまにまに」というものだ。それを『土左日記』の当該コンテキストでは、「山」を「海」に転移させ、海が風と波によつて荒れるのは「海の神」の意思のままであり、それを鎮めるために「神の御心」のままに、すなわち「神のまにまに」に沿うようにという「楫取」の助言によつて、「幣」に追加して、二つとない貴重な「鏡」を奉るはめになってしまうのである。

4 プレテキスト『伊勢物語』の位相

(A) ……と言ひける間に、「鹿兒の崎」といふ所に、守の兄弟、また他人、これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下り居て、別れ難きことを言ふ。守の館の人々の中に、この来たる人々ぞ、心あるやうには言はれほめく。かく別れ難く言ひて、かの人々の、口綱も諸持ちにて、この海辺にて、担ひ出だせる歌、

惜しと思ふ人やとまると葦鴨のうち群れてこそ我は来にけれ
と言ひてありければ、いといたく賞でて、行く人の詠りける、
棹させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな

と言ふ間に、楫取、もののあはれも知らで、己し酒をくらひつれば、
「早く往なむ」とて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」と騒げば、
「船に乗りなむ」とす。この折に、在る人々、折節につけて、漢詩ども、
時に似つかはしき言ふ。また、ある人、西国なれど、甲斐歌など言ふ。

(十二月廿七日 五―六頁)

(A) 「鹿兒の崎」の送別の場面である。ここは一読して解るように、

明らかに『伊勢物語』の「東下り」、特に「都鳥」の段を擬き・もじり・パロディ化していると言えるだろう。

既に長谷川政春によって説かれているところでもあり、長谷川はこの場面とともに、一月十一日の「羽根」の場面(B)、そして一月廿九日の「土佐の泊り」の場面(C)とを併せ指摘し、『古今和歌集』羈旅の歌41番(業平歌)・42番(読み人しらずの歌)が典拠である由説いている。

(B) 今し、「羽根」という所に来ぬ。稚き童、この所の名を聞き、
て、「羽根」といふ所は、鳥の羽根のやうにやある」と言ふ。まだ
幼き童の言なれば、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌
を詠める。

まことにて名に聞く所羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがな
とぞ言へる。男も女も、へいかで疾く京へもがなと思ふ心あれ
ば、この歌へよし」とにはあらねど、「げに」と思ひて、人々忘れず。
この「羽根」という所問ふ童のついでにぞ、昔へ人を思ひ出でて、
いづれの時にか忘るゝ。今日はまして、母の悲しがるゝことは。下
りし時の人の数足らねば、古歌に、「数は足らでぞ帰るべらなる」と
いふ言を思ひ出でて、人の詠める、

世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな
と言ひつゝなむ。
(一月二日 一二―二三頁)

(C) おもしろき所に船を寄せて、「こゝや何処」と問ひければ、
「土佐の泊」と言ひけり。昔、「土佐」と言ひける所に住みける女、
この船に交じれりけり。そが言ひけらく、「昔、しばしありし所の
なくひにぞあなる。あはれ」と言ひて、詠める歌、

年ごろを住みし所の名にし負へば来寄る波をもあはれとぞ見る

とぞ言へる。

(一月廿九日 二二頁)

「都鳥」の詠を典拠とする三つの場面について長谷川政春は、以下のよ
うな先駆的分析を行っている。

土佐日記は、古今集の業平の「都鳥」の歌を三つに分け、それぞれに
土佐日記らしく生かしているのである。しかも、注意されることは、
その三つの場面が有機的に構成されていることである。「羽根」の場
面と「土佐の泊り」の場面は、聞いた名に触発されて歌を詠む点で共
通であったが、その内容では都への想いと土佐への想いと違いが
あって対照的である。さらに、「楫とり」の場面では、楫取りの「も
のあはれ」の心のなさをあげつらっているけれども、「土佐の泊り」
の場面では、「あはれ」が主題になり歌いあげられている。まさに対
照的である。また「西国なれど」東国の甲斐歌を唄ったわけだが、「土
佐の泊り」の場合にはその「西国」が顧みられ歌われている。そこに
私は一種の呼応関係を見るのである。

この長谷川の分析を踏まえ、私の立場からもう少し付け加えてみよう。
ただし小稿は長谷川の立場とは異って『古今和歌集』の典拠論ではなく、
あくまでも『伊勢物語』の引用論、それもパロディ論を展開してみたいと
思うので、(A)をもう少し『伊勢物語』の「東下り」、九段の言説に引き
つけ、対話、関連させてみることにしたい。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あ
り。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、
かぎりなく、遠くも来にけるかな」と、わびあへるに、渡守、「はや
船に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむ」とするに、みな人
ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き

鳥の、はしとあしと赤き、鳴のおほきさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやとよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

（小学館新編日本古典文学全集 九段 一二二―一二三頁）

（A）京の都から「東国」に下って行つた「男」は、都を懐かしんで望京の思いを吐露している。歴史地理的に「土佐」は、言うまでもなく京の都の南方に位置する。¹³

にもかかわらず『土左日記』には、「西国なれど、甲斐歌など言ふ」と記されているように、「西国」＝西方という認識で捉えられている。これは『伊勢物語』を踏まえての、パロディだからこそなしうることなのである。『伊勢物語』の文学的な権威を逆手に取り、その「東国」に対しての「土佐」＝「土左」として、正反対の方位の「西国」としての位置づけがなされているものと理解することができるのである。

『土左日記』という虚構の文学の世界において、歴史地理の「土佐」は、「土左」という表記のもとに変換され、京の都の「西」の方位として位置づけ直されたものと推察されるのだ。だから、その「土左」から「京」の都への旅は、

『伊勢物語』／『土左日記』

東下り／東上り

なのである。『伊勢物語』の「東下り」の段に対して、そのもじり、パロディとして『土左日記』は、「東上り」の趣向となってしまうのである。

またここに東国を代表して「甲斐歌」が出てきた理由も、『古今和歌集』羈旅歌の416番歌の詞書に、

甲斐国へまかりける時、道にてよめる

とあつたことに連関し、「甲斐国」↓「甲斐歌」と、転移されたものと読むことができる。

いずれにしても、『土左日記』は、歴史社会の方位感覚には拠らず、「引用」連関としては『伊勢物語』のもじり、パロディという文学伝統的な方位感覚に拠っているということになる。

さてそもそも『伊勢物語』は、

むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、……

（七段 一一九頁）

むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきてへすみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。……

（八段 一一九頁）

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。……

（九段 一二〇頁）

とあるように、「むかし」という時空設定の中で都に居づらくなつた「男」が、一人二人の友と東国に下ってゆく話として語り出されている。対して『土左日記』は、

ある人、県の四年五年はてて、例の事どもみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年来よく比べつる人なむ、別れ難く思ひて、日しきりに、とかくしつゝ、の、しるうちに、夜更けぬ。(三頁)

とあるように、現在時において、前国守である「ある人」が任期を終え、惜しまれつつ、部下を引き連れ船で都を目指し上つてゆく。

親しい人そうでもない人、たくさんの人々に見送られ別離を惜しまれる「ある人」の旅立ちには、『伊勢物語』の男の、見送る人もない寂しい旅立ちとは、およそ対照的である。

ここで『土左日記』の「ある人」という呼称について、少し考察しておこう。もちろん、『土左日記』がなぜこんな呼称を採用したのかという合理的な理由の説明はできないが、『伊勢物語』のパロディという角度から述べてみるならば、「むかし、男……」という『伊勢物語』の「男」という主人公を指示する呼称を学習していると言えるだろう。

まず『伊勢物語』の「男」という呼称は、一二五段構成の流布本を前提とするならば、主人公の「男」は、読者に「在原業平」を想起させ、しかも、「男」という男性一般を指示する記号性により、「在原業平」という個体だけではなくて臚化の作用によって、むしろ、いろいろな「男」のイメージを重ね合わせられる仕掛けとなっている。その一つとしては、読者自身を「男」に同化させ、自己が虚構世界の「男」となって『伊勢物語』の世界を生きていることができ、また同じ世界に生きる「女」と愛を語ることもできるということである。

対して『土左日記』の「ある人」という呼称は、同様に記号化・臚化の作用があるものの、「ある人」、「或る」が付加されていることにより、同化という点において「男」よりも、心理的に距離を感じさせることは否め

ない。

そして、長谷川政春も指摘するように、《テキストは、貫之の作であることを読者も諒解していることを前提にして成り立っている。つまり「紀貫之」は作者の名として外側にあったばかりでなく、もっと積極的にテキストの中に入り込まれてゐるのである。もちろん、「ある人」をすべて「紀貫之」と一義的に解釈してしまうと、矛盾・齟齬が生ずることは言うまでもない。『伊勢物語』の「男」と同様に、「男」が「在原業平」を想起させる人物でありかつ、また「男」一般であったように、『土左日記』の「ある人」も、「紀貫之」を想起させる人物でありかつ、「紀貫之」ではない人物としての「ある人」の事跡として、個々の文脈ごとに辻褄を合わせた理解をしなければならないだろう。

さて『伊勢物語』と『土左日記』との対応を図式化すると、およそ次のようにならうか。

『伊勢物語』	『土左日記』
むかし、男	／ (いまの) ある人
都から東国へ	／ (土左) から都へ
少ない友との孤独な旅立ち	／ 部下を引き連れ、別れを惜しまれる旅立

プレテキストである『伊勢物語』の解釈について、若干言及しておきたい。

その河のほとりにむれるて、思ひやれば、かぎりなく、遠くもきにけるかな」と、わびあへるに、……

この部分に関して、諸注を批判しながら自説を披瀝する小松英雄は、次のように述べている。

仮名文テキストは、引用符を受け付けない書記様式であり、叙述から引用に自然に移行しているのです、どこまでが叙述であり、どこからが引用であるかは区別できないことです。ここはそういう典型的事例のひとつと言つてよいでしょう。あえて区別すれば、つぎのように「おもひやれば」が叙述と引用のツナギになっています。

その川のほとりに群れ居て 思ひやれば（以上叙述）

（以下引用）思ひやれば 限りなく……⁽¹⁸⁾

小松の主張は正しい、もつともであり、私も賛成である。だが、こうした「仮名の散文」の特性に関する見方は、先行する塚原鉄雄の「鎖型の構文」という研究の思考方法と、まったく同一ではないかと思う⁽¹⁹⁾。

「思ひやれば」という語が、その上の言説とその下の言説とを共通に繋ぐ「鎖の輪」だという具合に理解すればこそ私の解釈においても、

思ひやれば、かぎりなく、遠くもきにけるかなと、わびあへるに、……

というふうに、私はここを「内話文」と理解していながらも、閉じめの山形括弧「」を付けただけで、「思ひやれば」の部分に、開始の山形括弧「」を付けなかったわけである。「その河のほとりにむれあて」という「地の文」から「かぎりなく、遠くもきにけるかな」と、という具合に「内話文」に移行してゆくわけであり、これは中島広足の言う「移り詞」に相当する言説であろう⁽²⁰⁾。

次も、同様の例である。

乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。

さて、

樽取、もののはれも知らで、己し酒をくらひつれば、早く往なむ、とて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」と騒げば、船に乗りなむとす。

傍線部は、プレテキストである『伊勢物語』の当該場面が「もののはれ」を醸していることを逆説的に指摘しており、それを踏まえたこの場面は、その「もののはれ」という理念を心ならずも否定することで、自嘲的な「諧謔」となっているのである。このように『土左日記』のパロディは、『伊勢物語』の「あはれ」という権威を脱構築化することによって、自嘲的な笑いの「諧謔」が生成されてくるのである。

『土左日記』の別れを惜しむ側の贈歌の、「葦鴨のうち群れて」ということばも、『伊勢物語』との引用連関から発想されていると読めるだろう。「都鳥」に対して「葦鴨」なのであり、孤独な印象のある「都鳥」に対して、「葦鴨」は、「うち群れて」いる鳥であり、にぎやかな鳥なのである。また、『伊勢物語』は、「男」一行を、

その河のほとりにむれあて、……

と表現していた。『伊勢物語』においては、「男」一行が東国という異郷の地にあり、少ない友人と結束しなければ「都人」としての自己の同一性（Identity アイデンティティ）が保てない不安感を抱きつつ、「むれあて」しているのに対して、その引用の連関としてパロディである『土左日記』は、「衆」

を頼みにして「我も我も」とやって来た、葦の中で鳴き叫ぶ、「烏合の衆」ならぬ、「うち群れ」た「葦鴨」なのであろう。

以下に『伊勢物語』と『土左日記』との対応、対照を図式化するならば、次のようになるうか。

『伊勢物語』	／	『土左日記』
(旅の終点)	／	(旅の始発)
河のほとりにむれゐて	／	磯に下り居て
(存在を氣遣つて)	／	(存在を氣遣つて)
くれる人は都に)	／	くれる人は鄙に)
〔船出の理由〕		
日が暮れる	／	潮が満ち、風が吹く
都鳥(「都人」の象徴)	／	葦鴨(「土左の人」の象徴)
独詠歌	／	贈答歌

注

(1) 東原伸明「女もしてみむとてするなり」『土左日記』の虚構の方法——劣位項の脱構築もしくは象徴的な〈女〉への共感の論理——『古代散文引用文学史論』(勉誠出版、二〇〇九年)。東原「価値逆転の論理・『土左日記』の虚構の方法——劣位項の脱構築および虚構の史実化——」『高知女子大学紀要 文化学部編』第59巻、二〇一〇年三月。

(2) 東原伸明「価値逆転の論理・『土左日記』の虚構の方法——劣位項の脱構築および虚構の史実化——」『高知女子大学紀要 文化学部編』第59巻、二〇一〇年三月。

(3) 清水孝之「近世前期の大湊研究」『高知女子大國文』三号、一九六七

年八月初出、『土佐日記の風土』(高知市民図書館、一九八七年所収)。

(4) 萩谷朴「17 一月八日 大湊」・「29 一月廿日(津呂)」『土佐日記全注釈』角川書店、一九六七年。

(5) 竹村義一「大湊——本論篇——」・「室津(二)」『土佐日記の地理的研究 土佐国篇』(笠間書院、一九七七年)。

(6) 菊池靖彦「第三章『土左日記』」『古今集』以後における貫之(桜楓社、一九八〇年)。

(7) 神田龍身「はしがき」『紀貫之——あるかなきかの世にこそありけれ——』(ミネルヴァ日本評伝選、二〇〇九年)。

(8) 長谷川政春「土佐日記の方法——紀行文学の発生と羈旅歌の伝統——」『東横国文学』第14号、一九八二年三月。

(9) 長谷川政春「土佐日記へのアプローチ」『紀貫之論』(有精堂、一九八四年)は、『幼女の死』は、作者の卓越した虚構というレトリックであった」と言い、その理由を、『古今和歌集』羈旅歌を典拠により生成していることを説いている。

(10) 木村茂光「日本」的儀式的形成と文人貴族『国風文化』の時代』青木書店、一九九七年。

(11) 注(9)の長谷川政春論文。

(12) 土方洋一「私情の表出——『土左日記』論——」『日記の声域——平安朝の一人称言説』右文書院、二〇〇七年。

(13) 神田龍身「土佐日記——言葉と死——」『紀貫之——あるかなきかの世にこそありけれ——』(ミネルヴァ日本評伝選、二〇〇九年)。

(14) 注(9)の長谷川政春論文および、長谷川「表現としての土佐日記」『東横国文学』第17号、一九八五年三月。

(15) 注(14)の「表現としての土佐日記」。

(16) そのことを紀貫之と同時代の史料、『延喜式』巻二六陰陽寮式に掲載

されている一二月晦日の「追儼の祭文」の記述で確認しておく。

……事別きて詔りたまはく、「穢惡はしき疫の鬼の、處處村に藏り隠らふをば、千里のほか、四方の堺、東の方は陸奥、西の方は遠つ値嘉、南の方は土佐、北の方は佐渡より彼方の處を、汝等疫の鬼の住處と定めたまひ行けたまひて、五色の寶物、海山の種種の味物を給ひて、罷けたまひ移したまふ處處方に、急に罷き往ね」と追ひたまふ」と詔るに、「奸ましき心を挟みて、留まり隠らば、大儼の公・小儼の公、五の兵を持ちて、追ひ走り刑殺さむものぞ」と聞こしめせ」と詔る。

（岩波古典文学大系『祝詞』 四五九頁）

この祭文によれば、「穢惡はしき疫の鬼」は、都の四方の境界から、すなわち東は「陸奥の国」、西は「九州は五島列島の一部」、南は「土佐」、北は「佐渡」からそれぞれ排除すべきことを説いており、歴史地理的に「土佐」は、京の都の南方にあるという認識である。

（17）長谷川政春「解説 土佐日記、その表現世界」（『新日本古典文学大系』岩波書店、一九八九年）。

（18）小松英雄「あづまくだり 主部（第九段）V これなむ都鳥」「伊勢物語の表現を掘り起こす―『あづまくだり』の起承転結」笠間書院、二〇一〇年。

（19）塚原鉄雄「鎖型の構文」『平安文学研究』一九五六年六月初出、『国語構文の成分機構』新典社、二〇〇二年所収。

（20）中島広足「うつり詞」「海人のくゞつ」（『日本随筆大成』第一期）10『吉川弘文館、一九七五年』。池田節子「移り詞」（秋山虔編『別冊國文學源氏物語事典』學燈社、一九八九年五月）。

【付記】

小稿の英文題目・要旨は、本学のローレン・ウォラー講師のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。